
秋の夕暮れ

K_Sayuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋の夕暮れ

【Nコード】

N2088Z

【作者名】

K | Sayuto

【あらすじ】

ある秋の日、日本の人口は男子が1人減って、女子が1人増えたと思う。

高校で野球部に入っていた水木 秋次はある日起きると女の体になっていた？

よくある異世界物でもなくよくある転成物でもなく、よくあるなっちゃったパターン。神はむかっけー。

更新速度を超低速に変更します。

まえがき

俺は水木 秋次、只今人生最大のいや、人類最大の危機に立っております。

昨日は部活の練習の後に普通に親友で幼馴染の静流と一緒に帰って、家についたら風呂入って、リカーン見ながら飯食って、予習なんてめんどくせーと睡眠に入ったわけだ。

で、それがどうやったら今の状況につながるのかと考えている。繋がるどころか接点すらちげえ。そもそも次元がちげえよ。

で、今更だけど今の状況はというと朝起きて寝癖があるか確認しようとして鏡を見たらそこに写っていたのはとんでもないほどの美少女なわけで。勿論オレツ娘って訳じゃない、いや他人から見たらそれ以外に何にも見えないか。

言い換えよう、俺は男だ。少なくとも昨日まではそうだったはずなんだよ。

第一話 俺が女に！？（前書き）

水木 みずき 秋次 しゅうじ

ある日起きると女の体になっていた主人公。女体化後はストレートな長髪で黒髪、目はパツチリとしていて小顔で肌は白く、胸が小さいこと以外スタイル抜群で身長が低い美少女

水木（水木） 和枝 かずえ

秋次の母親でスタイルは良くとしの割に結構若く見られている。

田村 たむら 静流 しずる

秋次の親友で家族よりも信頼できる存在。秋次に女になってしまった事を家族よりも先に打ち明けられた。

第一話 俺が女に!?

「なんだよこりゃ」

鏡を見て放心する。少し経って俺はある物を確認しようと思った。そう、男の財宝である伝説の如意棒と黄金の宝玉を。ズボンの中に手を入れるとそこには何もなく妙にスカスカしていた。

そのうちそういやあさっきの声も妙に高かった様な……。

「あー、あー」

と高い声が出る。やべえ、この顔とか声とかまじかわええ。俺はあえて視界のしたの方の本来胸板がある位置にある小さな膨らみは無視しておく事にした。だって触ってみて感じちゃったりとかしたらヤバそうだったから。

あーどうしようかなこれから。などと考えていると、秋次起きなさーいとオカンの声がしたので俺は

「今準備ちゅー」

と危うく言っただけで済みそうになり慌てて口を閉じたが危機は去らなかった。何も返事がない事を不審に思ったのかオカンが階段を登って来ている。

ヤバイ、どうしよう。そうだった、鍵をかけよう。

ガチャ

と鍵がかかる音がして安心する。

「秋次ー、なんで鍵なんて閉めてるのー？開けなさいー」

とオカンがドアをノックしている。俺は

「風邪引いてるから今日は休む」

と言ってしまいそうになるが止める。俺は机の上にある紙に”風邪引いたから今日は休む、喉がやべえほど辛いからうつらないように俺を隔離する”と綺麗とは言えない自分で書きそれをドアの下の隙間から通す。

「あー、風邪そんなに酷いなら病院行きなさい」

病院だつて、冗談じゃないそもそも今の俺じゃ保険証とか使えねえだろ？

俺は”行くのも辛いから”と書いて紙を送る。

「そう、それじゃ今日は母さんもお姉ちゃんもいないからちゃんとなんか食べたりしなさいよ」

とオカンが去って行ったので一息付く。って、今ので打ち明けにくくなった気がするのは俺だけだろうか？でもどうすりゃいいんだ？女の体の事なんかなーんもわかんねえし。ま、考えてもしゃーないし寝るか。

今日は秋次休みか、まっプリントとか持ってってやるついでにお見舞いでもしてやるーかなあと試ってみるけどいざそうしようと思つとめんどくせえ。

ピロロ、

ん、メールか。つと秋次からだ。えつと内容は”今日の放課後、静流空いてるか？”だ。何も予定とか・・・ないよな、よし。俺は”大丈夫”と送ると”じゃあ今日来てくれ”と届いた。

今日は6時間授業だったが秘技、全教科睡眠術により体感時間的には2〜3時間で終わった気がした。

放課後、俺は約束通り秋次の家へ来た。インターホンを鳴らすと誰もこなかったがメールで”開いてるからはいって”と言われたので俺は玄関に入り秋次の部屋の前まで来た。

「しゅーじー、きつたぞー」

と俺がそう呼びかけると下から紙が来たので読んでみると”話がある、絶対信じてくれるか？”と書いてあったので。

「なんの事だかわかんねえけど俺は信じるぞ」

と言うとガチャと鍵の開く音がしてゆっくりと顔が覗いてくる。しかしその顔は秋次の物ではなく女の子の顔だった。

「あれ、秋次……の彼女？」

秋次には彼女はいなかったと思うが……、まさかこの事だったのか話って？と俺が思ったがその話はそれと全く違った物だった。

「ち、違う……俺が、秋次……だよ」

ナンダツテ？コノオンナノコガシユウジダツテ？

「ああ、同名か。でこの家の息子の秋次は？」

俺がそういうと秋次と名乗った女の子は少し俯いてから顔を上げ。

「だから、俺がこの家の息子の秋次。お前の親友の秋次だよ」

は？何を言ってるんだこいつは、そもそも息子ってのは男だろこいつはどうみても女じゃないか。

「おいお前、冗談もいい加減にしとけ」

と俺が声のトーンを低くし少しキレ気味な喋り方で言うと。そのいかれた女の子は一瞬ビクツと身体を強張らせる。

「だ、だから、俺がしゅ」

「いい加減にしろっつってんだよ、おい秋次何処だよ悪ふざけなんかしてないで出て来いよ」

俺がさっきの喋り方のまま壁を叩いて言うと女の子はさっきよりも怯えた表情になるがすぐにもとの表情に戻し。

「好きな物は麺類、嫌いな物は柑橘類、誕生日は9月1日、A型、両親は共に自営業」

と顔すら合わせた事のない女の子が言ったのでびっくりしたがどうせ秋次が前もって言うように指示していたのだろう。

「なんでも良いから聞いてみてよ秋次なら絶対にわかるような事、全部答えて見せるよ」

女の子はさっきの表情のままそう言ったので俺は色々と聞いて見る事にした。

「秋次の初恋は？」

「明美さん」

「俺と秋次が出会ったのはいつ？」

「小学2年生のとき遠足の班決めで余ってたお前を俺が誘った時」

「俺の特徴は？」

「高所恐怖症、めんどくさがりや、物忘れが激しい、元不良、頭は悪い、さらに」

ってこいつ本当に全部当ててやがる、本当に秋次なのだろうか？
・・・ってなんか俺すごい侮辱されてる気がする。

「あー、もうわかった」

「じゃあ信じてくれんのか？」

「信じない方が無理あるって」

「ここまで言われたら信じる他ない。でもなんで女の子の姿なんだ？」

「実は・・・今朝起きてみたら女になって、ほら胸とか膨らんでるだろ」

そう言っただけの子、否、秋次は俺の右手を胸の上に乗せた。俺は思いのほか胸が柔らかくて気持ちよく手をそのままにしておく。秋次の顔が真っ赤になってた。

「そろそろ、離してくれよ」

「あつ、わりい」

俺は慌てて手を離れた。

「それで、お前の両親は知ってるんだよ・・・な？」

一瞬ピクツと反応した、それだけ十分わかった。両親はまだ知らない。何故わかったかって？だてに幼馴染やってねえよ。

「お前ならもうわかったよな、それで、お前から俺のオカンとかに言ってくれないか？」

どーせそう来ると思ったさ、まあ親友が困ってるのを見過ごせないし。

「わぁーっ たよ、その代わり今度奢れよ」

「ありがとな」

「っへ、今更感謝すんなよ気持ち悪・・・くもねえな、今のお前なかなか可愛いぜ。ぜってえーモテるぞ」

「悪ふざけはもう寄せよ。にしても、改めて思ったけど・・・お前背たけえな」

俺が高いんじゃないとお前が小さいんだそう思ったけどまあ実際俺も高い方ではあるし秋次は女になって2〜3回りくらい小さくなっただと思う。と俺が考えていると。

「ただいまぁー」

秋次の母親が帰って来た。さあて、ミッションスタート。

第二話 とりま、ミッションコンプリート？

「静流、頼んだぞ」

俺がそう言つと静流は任せると言つて下に降りて行く。俺も才力に見つからないように降りる。

「おばさん、お邪魔しています」

「あら、静流君じゃない。秋次のお見舞い？」

「まあ、そんなとこです」

「そういつもうちの子がお世話になってるわねえ」

「いえいえ、それより今から重要なお話があります。おい、こい
「よ」

多分俺を呼んだのだろう。静流の横に行く。

「この子は？」

オカンが聞く。

「おばさん驚かないで聞いてください。この子は秋次です。今日朝起きたらこうなつてたみたいでさっき秋次にしかわからない様な事を聞いたら全部答えたので」

「秋次？本当に秋次なの？」

「ああ、オカン。俺だよ秋次だよ」

「まあ、なんてこと。こんな……可愛くなっちゃってへ？」

直後俺はオカンに抱きしめられた。あれ？オカンの胸がめっちゃあたってると興奮しない、ってか親に興奮するわけないか。

「オカン、疑わないの？」

「静流君だって言ってるし、私は信じるわ、お姉ちゃんやお父さんには私から言うておくわ。これからの事は全部任せなさい」

あれ？涙が出てくる。何時の間にか俺は声をあげて泣いていた。

「お、オカン。ありがとう」

「あ、秋次。今日からオカンじゃなくてお母さんって呼んで頂戴。それがお礼の代わりよ」

今まで一度もお母さんなんて言ったことはないから少し恥ずかしいがこのさいしょがない。

「わかったよ、お母さん」

「うん、秋次はひとまず部屋にいなさい。あ、静流君も秋次と一緒にいてあげてね。あ、くれぐれも間違えだけは犯さないようにね」

まっとお母さんなぜ最後のほう笑ってたし。なんかこええよ。

「はい、できる限り間違いは犯さないように頑張ってみます」

っておい静流完全拒否しろよ。

「さあて、上に行こうか」

静流がそう言って俺の腕をつかむ。こええよ、前の俺だったら簡単に振りほどけただろうけど今の俺じゃ筋力とか異常なほど落ちてるから振りほどく事も出来ない。

恐喝されるときってこんな感じなのかなあ？

俺は静流に連れて行かれる形で自分の部屋に戻ってきた。

「それにしてもお前本当に女になったんだなあ、力とか全然なくなってるだろ」

「え、なんでわかんだよ」

「だっってお前さつき本気で俺の手を振りほどこうとしてただろ」

それは本当のことだった、本気でふりほどこうとしたがビクともしなかった。大体今まで静流にどんな事をされても恐くなかったのに（とあることにより全治2週間のけがを負わさせられた過去あり）さつきは物凄く怖く感じた。もしかしたら物理的な事以外でもなにか変わっているかもしれない。

「お前これからどうするんだ学校とか行けんのか？」

たしかにそれは大きな問題だが今はそれ以上のもんだがいある、今の俺に戸籍はない、つまりはたから見れば女になったと騒いでいる謎の痛い美少女以外の何者でもない。そう思っていると、急に扉が開きお母さんが入ってきた。

「秋次やったわ、お父さんがうまくやってくれるって。そのための精密検査とかやるから今すぐ来て欲しいって、準備しなさい」

「準備ってたってどうすりゃいいんだよ」

「着替えに決まってるでしょ」

あー、着替えですかそうですか。って着替え？まてまて、俺は健全な男であり健全な男がこんな可愛い美少女を襲わないわけがない、ってよく考えたらこの美少女って俺じゃん、流石に自分で自分を襲う事は出来ねえよ。でも待て、着替えたら見えてしまっくんじゃないか？例の膨らみが。駄目だそんなものを見て平常でいられる自信がない。

「どーした秋次、顔真っ赤だぞ？」

ヤバい、いろいろと妄想してたら顔がめっちゃ熱い。てか、男のときにはこんなに熱くなんかったぞ。

「う、うるせえ。ってか静流はとつとと出る」

「そうねえ、流石にそれはまずいわね」

とお母さんが静流を部屋の外に出しこっちを見る。

「さあ、着替えなさい」

は？

「いや、お母さんが着せてくれるんじゃないの？俺目閉じてるか
ら」

「何いってんのよ、これからその体で何万回も着替えることにな
るんだから早めに慣れときなさい。それに」

それについてなんか怖い予感が……

「こんな美少女が恥ずかしがりながら着替える姿って可愛いじゃ
ない」

こんの、あ・く・ま。

第三話 身近な落とし穴（前書き）

水木 みづき 柚木 ゆずき

秋次の父親。職業は？と聞かれれば。風の吹くまま気の向くままと答え。普段は何やってるんだ？と聞かれれば。とある企業の社長と答え。今までどこ行ってたんだ？と聞かれればボランティアとかと答える。相当一般とずれている謎の多い人

第三話 身近な落とし穴

結局俺は、女物の服などを持つてゐるわけではないので（持つていたら変態だつてwwww）ジーパンにパーカーというラフな格好にしたわけだ。しかし・・・、俺が普段着ている服は全部ブカブカだったので俺が小学生の時に着ていた服がぴったりだったので助かった。お母さんがとつておいてよかつたと思う。

「それじゃ静流君、お留守番頼めるかしらねえ」

「ええ、大丈夫です。秋次、まあがんばつてこい」

こいつ顔では真剣な振りしてるが内心では面白がつてるし。ほら、口を良く見てみるとひくひくしてるじゃねえか。帰つたらいろいろといじつてやる。

いきなりですが、主人公はあまりの恥ずかしさによりタヒつてこの小説は終了いたしました。というのも、精密検査でいろいろと図るわけだ、検査する人が女性だったのは良かったんだ、多分・・・。そこで聴診器あてられたり、人間ドックやられたり、拳句の果てにはスリーサイズを測られたときに測る人の手が俺の胸に当たつて声をあげてしまった。肌の感覚がすごい敏感になつてた・・・。現時点で確認できた変化はまず体が女になつてしまつた事だがそれに連動して肌の感覚が敏感になつてた、まあ後は身長とか髪とか筋力とか。精神面では、めっちゃ怖がりになつてた事かな、もしかしたら涙もろくなつていられるかもなそれは結構つらいな。これから先こんなんでやつてけるのだろうか？まあ、検査の結果はあと数分で出るらしいのでそこで健康であることを願う限りだ。俺が座つて待

つてると一人の男が目の前に現れた。

「やあ秋次、気分はどうだ？」

俺が顔をあげてみるとそこにはよく知っている人の顔があった。

「オトン……、気分は、最悪かな」

「そうだ、俺の事もお父さんって呼んでくれないか、それにほら」

オトン、いやお父さんが手を差し出しその手には何かがあった。

俺はそれを見ると改名用の紙だった。

「これは？」

「いくらなんでも女で秋次は変だろ、だからいつそ名前も変えてしまおうと母さんと話し合っただ」

いつの間に話し合っただよ、それにしても結構親って子供の事を考えているんだな。深くそう思うよ。

「それで名前の事なんだが、あまり変えるのもお前がなれるのが大変だろ。だから、お前の字からとってあきだ、漢字はそのまま秋でどうだ？」

秋か、読み方だけなら似ても似つかない名前だけどまあそこはやっぱり慣れるってことか。漢字を間違っ事はないしそれでいいな。

「それでいいよ」

「よし秋、受け取れ」

お父さんがそう言っけてポケットから何かを取り出した。それは身分証明書でもうすでに水木 秋という名前が書かれていた。お父さんって本当はマジシャンだったのか？

「いやそんなに驚くな、もうすでにつくっておいたんだよ。お前がいやだっけ言ったら再発行しようと思っけてただけだ。そうそう、検査結果だがいっけて健康」

「本当か、よかつたあ」

「そう早まるな、いっけて健康じゃなかつた」

え？今何て？

「お前は重度の日光過敏症でな。まあ今の時間帯はもう真っ暗だから何もなかつたと思うのだが昼間は日光に当たっけてはいけなないんだ」

「それって不可能に近くない？」

「日傘や、日焼け止めなどを使えばいいんだがそれでも日の光にあたり過ぎるといろいろと大変なことになるから気をつけろ」

それはそれは、相当つらい。俺これから生きていけるか自信無くなつた。

「で、お父さんもしかして……戸籍も変えられた？」

「はっはっは、心配するな。しっかりと水木 秋 性別女に変えたぞ」

「どうやら戸籍とかの心配は必要なくなったようだな、いったいどんな手段を使ったのやら。」

「そうだ、母さんはこれから仕事へ「キャバクラか?」

「違う、いたって健全なコンビニのパートだ。それと、静流君が家で留守番してくれてるんだって? お金あげるから彼と一緒にどこかであそびたい。お釣りはこずかいにでもしなさい、父さんも今日は帰りが遅くなるからな」

「そう言ってお父さんは財布から1万円を取り出す。普通に考えて5千円あれば十分なんじゃないかと思うがあまりは好きに出来るのであえて何も言わずにもらっておく。うっひゃ絶対7千円程度余るぞ(笑)。」

「わかったアネキは?」

「そっちは聞いてないが多分今日も遅くなるんじゃないか?」

「ふぁーい」

「そういって俺はあくびをしながらドアノブに手をかけようとするが。」

「ぐぶぶ」

「どうやら身長が縮んでいたのだからドアノブ(もともとここのは普通

のより高い位置にあった)が顎にあたった。

「大丈夫か、秋？顎が赤くなってるじゃないか。女の子になったんだから体を大切にしなさい」

「ふわあゝい」

なんか、いろいろと考えていたけど結構日常面で相当大変かもなあ………。戸籍とか大きなことを考え過ぎてそういう身近な事を全く考えていなかった。THE灯台もと暗し……。だな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2088z/>

秋の夕暮れ

2011年12月11日19時47分発行